# 零のパーツ

暁羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
零のパーツ

【Ｎコード】
Ｎ３８９０Ｙ

【作者名】
暁羽

【あらすじ】
世界が今の形を成さなくなった未来、その世界では平和という言葉と恐怖は背中合わせで存在していた。インフィニティ・モンスターと呼ばれる、この世のものとは思えない化け物たちは古代武器Ｏ－パーツでのみ殺せる。人々の希望はそれを扱える適合者と呼ばれるものたちによって作り出される平和であった。
少年ゼロ・カナギは天才であった。そして彼の側にはいつも少女のアリアと青年のブラッディの兄妹がいる。彼らは三人で旅に出ていたのだ。そんなとき、立ち寄った「川岸の町」でインフィニティ・

モンスターに馴染んでいる少年と少女を見た。彼らは旅の目的の一つは、ある人物の捜索。それが兄妹にとっての兄である、アダージャ。もしかしたらアダージャの情報が手に入るかもしれないと思い、彼らは少年と少女を助けるが、それは思いも寄らない出会いをもたらすこととなる。

神輝という団体に所属している劉峰はリィ長官の命令で「川岸の町」を調査に来ていた。インフィニティ・モンスターが出たという話しの真実を確かめに来たのだ。しかし町の人には出ていないと言われる。そしてそこで出会った兄妹が彼にここで起こった真実を語ってくれたのだ。

やがてゼロはアダージャと出会い、神輝にｉ‐パーツがあること知った。過ちによって魔物に使われてしまったｉ‐パーツの浄化と回収を目的として、三人は神輝を訪れたがそこで待っていたのは神輝創設者キサナのパートナーであり、インフィニティ・モンスターであるリィであった。汚れきったｉを助けるためにリィと戦うが、彼はもうギリギリのラインにいることを悟った。ｉも助けたいがリィも解放してあげたい、ゼロの思いがリィの僅かに残った意識を刺激する。

これは三人の旅、そして神輝の新たなリーダーが織り成す未来のあり方である。

# 0（前書き）

始まりの章です☆

# 0

それは、大昔の事。

世界が大寒波に見舞われ、その後、熱波がやって来た。急激な気温の変化は生き物全てに影響を及ぼし、人々だけでなく地球上の生物が地下へもぐることとなった。

それから幾日、幾月、幾年が過ぎ地上に緑と人と動物たちが戻ってきたとき、そこに過去の姿はなく、見たことのない何かが跋扈していた。およそ夢物語のような「魔物」と呼ぶに相応しい何かは地下にもぐっていた人々にとって、まさに脅威であった。

中でも特に知能を持ったものたちを人間たちは「インフィニティ・モンスター」と呼ぶ。

わかったことが幾つかある。その一つにインフィニティ・モンスターは古代武器でしか殺すことができないということ。何の力も持っていない人間は自分たちの集落を守るので精一杯、他人を助ける余裕などなかった。魔物たちの襲撃から身を守り、必死に生き延びてきた人々の最後の希望はＯ－パーツと呼ばれるものである。いつごろから存在していたのか、それは正確な形を成してはおらず、しかし意思を持った武器であった。使う者の意思をくみ取り、いかようにも変化するその不思議な武器こそ、古代武器に他ならぬものである。

大災害によって世界中に散らばったＯ－パーツの数は全部で七つ。丁度存在していた大陸と同じ数ではあったが、今はその全部が形を変えていた。あの広くて大きなアジア大陸でさえ陥没して原型を留めていない。日本にいたっては本州の一部を残すのみとなっていた。昔の日本を知るものはもう老人しかおらず、子供たちはこれが世界の形だと認識するほかない。

日本より遠く離れた地、旧ヨーロッパはそれでもだいぶ形を保っていた。そしてその地で世界を揺るがす研究が進められていたのだ。
インフィニティ・モンスターを滅ぼすための武器の開発、Ｏ－パーツを使用しないでそれを可能にする方法の研究である。

「ドクター」

女の呼び声で振り返ったのは端正な顔立ちの男性であった。
彼はこの研究所で唯一の医師である。

「どうした」

カルテをデスクに置き、女を見ると、その後ろには見慣れた少年が立っている。
「ゼロ」ため息と一緒に出てきたのは我が子の名である。
ゼロと呼ばれた少年は無表情のまま女に礼を言い、父親の元に歩み寄った。

「今日はどうした」

父に会うのに一々理由がないといけないのは少し悲しいことではあるが、少年がそれを気にしている様子はない。

「アリアとブラッディがこっちに来るって言っていたから、ここで待たせてもらう」

ゼロの口から出てきた名に父は「ああ」と軽くうなずいた。
正直、アリアとブラッディがあまり好きではない父親は気乗りしなかったが、めったに会えない息子からの申し出を断る理由はない。

「そういえばゼロと話すの、久しぶりだね」
場を取り繕うように言った父の言葉に少年は事も無げに言ってみせる。
「三年七ヶ月、二十二日、四時間五十六分ぶり」
「か、数えていたのか」
呆れ気味に尋ねたが、それよりも息子の言葉を信じるならば三年半以上会っていないことになる。それは自分が仕事に夢中になっていたせいなのか、それともゼロが研究に没頭していたせいなのか。
「研究は進んでいるのか」
父の問いにゼロは曖昧にうなずいている。
天才の名をほしいままにしていた息子らしくない態度に訝しげな表情を浮かべた。
「どうした、進んでいないのか」
父の問いにゼロは少しの揺るぎもなく言い切る。
「関係ないものには話さない」
関係ない。
それは父親と息子の間に一線引いたような言い方であった。
少年が何を思ってそれを口にしたかは無表情でわからないが、明らかに父は傷ついていた。が、悲しい顔をするわけにもいかず、引きつりながらも笑みを浮かべ「そっか」とだけうなずけば、ゼロは一つ、頭を縦にふる。

恐ろしいほど静かな沈黙が流れる、親子であるにもかかわらず気まずいと感じてしまうほどの静けさである。しかしそれを思っているのはきっと父親だけなのだろうが。相変わらずマイペースであるゼロはデスクの上に置きっぱなしにされていた本をぺらぺらと捲っていた。

そしてこの場に音をもたらしたのは外からの訪問者であった。

「ゼロ、いる～？」

自動で開く扉がゆっくりと動き、まだ誰なのか確認できないのに父と子にはそれが誰なのかわかりきっていた。

今、この研究所で少年をゼロと名で呼ぶものは父の他に二人しかいない。

オフスマン兄妹だけである。

見上げれば妹の表情がありありとわかる。

こちらから二人を見て取れるということは、あちらからも父とゼロを確認できるということで、最初に目に入ってきた少女は満面の笑みを浮かべ、開ききっていないドアをするりと避け、ゼロに抱きついてきた。

「ゼロ、久しぶり～」

語尾が延びる喋り方をするのは彼女特有の癖である。

太陽のように輝く美しい金糸の髪を持ち、新緑よりも明るい緑の瞳がきらきらと瞬く。容姿だけで判断するならば、間違いなく彼女は可愛らしい部類である。

「ゼロ、久しぶりだな」

落ち着いた男の色気とも思えるような声が聞こえ、少年が少女に

抱きつかれたままそちらへ目を移せば、そこには少し色素の薄いまるで銀色の髪をした青年が立っていた。今は見ることもない青空と同じ色の瞳が優しく微笑んでいる。

「はい、アリア、ゼロから離れなさい」

青年はいつまでも抱きついていた妹を引っぺがすと、少女の方も口を尖らせながら渋々と兄の命に従った。

「ブラッドのけち～」

少女の言葉に兄は苦笑するしかない。

三人の仲の良い様子を見ながら、父は少し羨ましくも思えた。するとようやく気がついたと言うような感じで、アリアが彼のほうに向いた。

「あら～、お久しぶりです～」

「二年ぶりですね」

ブラッディの言葉に今度は父親が苦笑する番である。

本当に仲が良い。出てくる言葉まで同じようである。

「ゼロも五時間ぶりですね」

「えっ」

驚きの声を上げたのはもちろん父であった。

「おまえたち五時間前にも会っていたのか」

彼の問いに三人は「うん」とうなずいた。

元々ここの研究所の一員であるゼロと被験者である二人が顔を見合わせていないはずがない。それでも五時間ぶりなのだからかなり間が空いている方と言えるだろう。

「父親よりもこいつらと会う時間の方が多いのか」

項垂れている彼にさらなる追い討ちをかけたのは、表情のない少年であった。

「大事だから」

それを聞いて喜んでいるのは少女と青年である。

「ゼロ〜、もう本当に大好き〜」

ゼロとは違いアリアはくるくると表情を変え、一度でも同じ顔つきでいない。

兄の方も妹よりは落ち着いているとはいえ、それでもゼロよりは感情を持っている。

「どうして、どうして、どうして！」

我儘な子供のように叫ぶ。

父とも思いづらい言動に三人はドン引きであった。

「やっぱりもう僕のことは父とは呼んでくれないのか、三年半以上も音信不通にしていたから怒っているのか？」

肩に手をかけ、がしがし揺らされ、ゼロは頭ががくがくと折れる。

「ちょ、っと、や、めろ！」

父親の手を思いっきり振り払い、歳には相応しくない表情で睨みつける。

「アリア、ブラッディ、行こう」

アリアとブラッディは目を合わせた。

「はい～」

彼女の方は素直にゼロに従い、兄の方は少しだけ心配そうである。

「……いいのか？」

問われれば、本当に気にしていないのか、それとも気にしないように努力しているのか、変わらない顔つきで答えが返ってきた。

「いい。こうなると長いから」

ゼロがそう言うなら「そうか」とブラッディもうなずく。

「それじゃあ、また……父さん」

入ってきた扉と同じドアを今度は三人でくぐり、それを見送りながらも「父さん」とゼロが呼んでくれたことに父親も純粋に喜んでいた。

「……もうとっくに親離れしているのか、あの子は」

寂しげに微笑み、父は患者のカルテに目を移した。

☆・★・☆

長い通路を三人で横並びに歩きながら、今日の実験の内容について話し合っていると、そこに彼らがもっとも会いたくない人物たちがやってきた。

「これは、これは、最年少天才研究者ゼロ・カナギ様ではありませんか」

振り返るのが嫌なアリアは正面を向きながら、うんざり、という顔をしている。一方、兄のブラッディは、やれやれ、と言った感じであった。

もちろんゼロは無表情のまま。

「相変わらず、仲のよろしいことですね、ブラッディ・オフスマン様とアリア・オフスマン様とは。やはり傍には従者が控えていないと安心できないのですか」

取り巻きの一人が嫌味を込めて言うが、三人は気にすることはない。仲が良いのは真実であるから否定しても仕方がない、それに二人がゼロの従者であることも公然の事実であった。被験者となったのも研究所内を自由に動き回れると聞いたからであり、ゼロと片時も離れないという条件付で飲んだものであった。だが、他人にとやかく言われるのは慣れていても、気にすることでなくても、良い気持ちではない。

「だいたい～、いつも暇なのよね～、愛美様は～」

イラついたアリアが振り向きながら言うと、彼女より若干見劣りはするものの、美人な女性が笑顔を引きつらせて立っていた。お供の二人もまあまあ美人ではあるがアリアほどではない。

「愛美様、いいかげんゼロに口出すの、止めたら～？」

「時間が勿体無いですよ、少しでも努力しないとゼロの足元にも及ばないのですから」

アリアとは違い不機嫌な顔などしていないブラッディは笑顔で辛辣な言葉を紡ぐ。これにはさすがの妹も少々相手に同情してしまったが、肝心のゼロは相変わらず何も思っておらず、ほとんど全員のやり取りを無視する形で歩きを止めなかった。

「ちょっと、無視するの、止めなさいよ！」

愛美の言葉にゼロもようやく歩みを止める。

「何が天才よ」愛美の隣にいる一人が笑いながら続ける。

「結局O-パーツに選ばれなかったくせに」

「そうよ、従者は選ばれたけれど肝心の主人は拒まれたのでしょ」

それはゼロにとっての悪口というよりは、ブラッディとアリアにとっての禁句であった。さすがに愛美もマズイと感じ、二人を止めようとしたが、もう遅い。

ただ単にイラついていただけの顔は一気に怒りに満ち、笑っていたブラッディも表情を失い、氷のような冷たい視線を向ける。

「ゼロを馬鹿にする奴は許さない」

「万死に値するぞ」

本当に一つの感情に心を支配されているときだけ、アリアの語尾は延びることがない。

またブラッディも優しい口調から一変して冷たく、感情を無くす、ただゼロに害を為すものを滅ぼす者となるのであった。

どんなに表情がころころと変わり女神のように愛らしくても、どんなに優しくて怒ることに疎そうな青年でも、二人の根は同じである。ゼロを侮辱する者は例えいかなる人間でも許さない。

大きく二人の口調が変わったことに気がついた少年は静かに立ち止まる。そして、

「ちっ」

大きく舌打ちをして、二人を制止した。

「気にしてない」

声は怒鳴っていないのに大きく、よく通る。

「でも！」

ゼロを振り返り、反論するアリア。

それを押し止めるゼロ。

「良い」

「しかし！」

ブラッディも何か言いたそうであるが、すべてを冷ややかな視線で射殺す。

「俺の命令が聞けないのか」

従者として主人の命令は絶対であるので二人は黙って従うしかない。

「俺の気が変わらぬうちに、そいつらを連れて行け」

年下に命令されるとは思いも寄らなかった愛美ではあったが、ここで背いて自分たちの命をさらす気には到底なれなかったので素直にうなずいた。

三人がいなくなったのを目で確認して、ようやくアリアとブラッディの怒りも形を静めた。と、思いきや少女の方はいまだに頬を膨らませて拗ねている。

「だいたいゼロは甘すぎるのよ～。あんな奴ら、一度コテンパンにしてやればいいのに～」

地団太を踏みながら緊張感の薄い言い方ではあるが、兄もそれには同意見のようで深くうなずいていた。

二人の言葉など気にしていないゼロではあったが、不思議と悪い気はしなかった。おそらく兄妹が真実、そう思っているのが伝わってくるせいだろう。

「……今日はもう帰る」

この後にまだ研究が残っているのにそう告げるとアリアの表情が途端に華やいだ。

「えっ！」

ゼロの声にすぐさま反応を示した少女に青年は苦笑する。

「どうして～？」

嬉しくないはずがなく、笑いながらアリアは尋ねる。本当は理由などすぐにわかっていたのだが、言葉という形で教えてもらいたかったからだ。

ゼロもこういう日はそれを拒否しない。

「おまえたちといたいから」

普段思ったことを口にしない彼が素直に表現することはとても珍しく、愛しかった。

「うん。一緒にご飯作ろうね～」

ゼロにべったりとくっつき、全身で彼を愛していることを訴えるアリア。

二人を優しい気持ちで見つめ、まるで包み込むような愛を与えるブラッディ。

そしてその二人を本当に信頼し、何にも変え難い存在だということを理解している幼き天才、ゼロ。

三人はこの瞬間が永遠に続かないことを知っていながら、それでも永久に同じであることを信じていたかった。

# 1―1

世界が変わりきってから、何日経ったとか、何年が過ぎたとか、そんなことわからなかった。

毎日同じことの繰り返し、インフィニティ・モンスターと戦闘したときのための練習である。それに少しの作戦技術を勉強して、一日が終わる。

世界を護る団体「神輝」では、所属している子供から大人、全ての民が戦闘技術を持っていた。それが悲しいことなのか、辛いことなのか、他者の目から見たら理解し難かったが彼らにとっては誇らしいことであるのは確かだ。

そして「神輝」には様々な役職がある。

例えば隊長、副隊長と言った戦闘に関するものや、怪我を治す治癒班というものもある。そのどれもが必要不可欠で、いらないものなど存在してはいない。

劉峰は今年ようやく一般に認められる戦闘に参加できる年齢、一八歳となった、どこにでもいる極平凡な青年である。所属は戦闘班、ただしその中でももっとも位の低い一兵卒の下端であった。同年代の友人の中にはすでに小隊長を任されているものもいるのに、あまりにも遅いスタートラインにようやく立てたのだ。

彼の肩で小さな足をぶらぶらとさせている少女が退屈そうに欠伸をする。

「ねえ、劉峰、退屈だよ」

相棒である彼にしか聞こえない声で囁くと、劉峰はため息を漏らした。

本来、インフィニティ・モンスターをこの中に入れることは重罪どころか、拷問のすえ死刑を宣告されても文句が言えないほどの罪であった。例えそれが心根の優しい妖精であっても決まりは決まりである。

「紅姫」

咎めるように小さく怒ると彼女はその姿を美しい真紅の羽をした鳥に変える。

普段はこの鳥の姿をしているので普通の人間の目は欺けた。しかし中には鋭いものもいるので劉峰はいつも気が気ではなかった。

紅姫とて人間に捕まって殺されることは避けたいところであるので、際立った無茶はすることはない。それでもこれほど退屈になるとすることもなくなり、彼をからかってみたくなるのだ。

しばらく劉峰が黙って武器庫の掃除をしていると、紅姫は変わらない鳥の姿で歌を歌い始めた。人の耳にはピィピィと言っているようにしか聞こえないが、とても綺麗な声は心を和ませてくれる。

「相変わらず、おまえの鳥は歌がうまいな」

二人しかいないはずだった空間に第三者の言葉が響く。

劉峰は驚き、入り口のほうを振り返るとそこにはこの神輝の中でもっとも偉い上司が立っていた。

「あっ」

挨拶をしなければいけないのに、あまりにも突然の出来事で頭の中が真っ白となってしまい、声がうまく出てこない。もっとも偉い上司なのだ。通常、劉峰のように下端が会えるはずなど、ほとんどないと言い切ってもいいほどの人物だ。その人が目の前にいるのだ、

緊張するなと言うほうが無理であろう。

「よい、よい。そう固くなるな」

年若い隊長とは違い、威厳が満ちているのは彼が長くその任についている証でもある。

劉峰は持っていた剣を握り締め、ようやく頭を下げるので精一杯であった。

その様子を見ていた彼は一言呟いた。

「……本当におまえは幼きキサナ様にそっくりだ」

小さな囁きは狭い武器庫の中では大きく聞こえる。

ギョッとしたのは劉峰だけではない、歌っていた声を止め紅姫さえ驚いていた。

「そ、そんな。キサナ様に似ているなど恐れ多いです」

劉峰の言葉に赤い鳥は何度も頭を縦に振る。

キサナとは「神輝」を創立したO－パーツを持つ青年のことだった。残念ながら彼は病によってもう他界してしまっているが、彼の武勇までは死んではいない。この「神輝」で暮らす男たちにとって彼は憧れの象徴でもあったのだ。

紅姫もその名を聞いたことはあった。インフィニティ・モンスターたちの間でキサナは青い死神と呼ばれていた。美しい容姿もそうであったが、何よりも彼の持っている剣の青さはモンスターでさえ身震いしてしまう。戦場にあって、一筋の血も浴びていない剣はまさに恐怖に近い。彼の通った道筋にはたくさんの屍があるにもかかわらず、剣は澄んだ青のまま、人は穢れもなく、まるで命だけを抜き取られるような感じである。

その青い死神と劉峰が似ている？
それは紅姫にとって少しの恐怖であった。今ならまだ劉峰に負けることはないが、この先、彼がキサナ同様Ｏ－パーツに選ばれでもしたら。そう考えながら、まだ見えない未来のことを思うことを止める。
キサナはキサナ、劉峰は劉峰、同じ人生を歩むはずがない。そして赤い鳥はまた歌を歌いだした。
「……綺麗な歌声だ、名を何と申す」
普通の鳥が自分の名前を言えるはずもないので、代わりに劉峰が答えた。
「紅姫と言います」
「こ、う、姫か」
彼はまるで何かを懐かしむように鳥を眺め、瞼を閉じた。
少々劉峰が困っていると彼はゆっくりと目を開き、ため息を一つ漏らす。それからこう言った。
「貴公に特別任務を授ける。ここより西の地に「川岸の町」に行き、噂の真実を確かめてきてほしい。何、危険な任務ではないので三日もあれば終わるだろう」
任務は普通、任務表として紙に書かれ手渡されるものである。いかに特別任務とは言え上司が直々に言い渡すことなど、ありえない。
「返事はどうした」
真剣な面持ちではあるが、笑いながら言う彼に、劉峰は慌てて返

事をする。

「は、はい！」

「よかろう。早めに取り掛かってもらえると嬉しいのでここの掃除はわたしがやっておこう。行きなさい」

「えっ、でも」

戸惑うのは当たり前である。

上官が武器庫の掃除など聞いたことがない。

「よい、行きなさい」

いくら彼がよいと言っても、中々動き出すことができない。本当に迷っているのだ。

「わかった」

戸惑いを理解した彼はうなずいて訂正する。

「命令だ、行きなさい」

命令にされてしまうと劉峰にどうこうする権利は一気になくなる。大人しく上官に従うしかないのだ。

「……はい、では失礼いたします」

仕方なく深くお辞儀をし、劉峰は武器庫を出て行く。忘れられている紅姫も優雅に飛びながら、彼の後を追った。

☆・★・☆

町を出てからしばらく、小さい少女は大きな少年を怒鳴り続けていた。

「もう、どうするのよ！　どんな噂がたっているのか聞いてこなくて、何をしに町に行くのか、意味わからないわよ！」

そう、あまりにも突然のことで劉峰はどんな噂の真実を調べに行ったらいいのか聞くのを忘れていたのだ。もちろんそれは彼自身、反省していたが紅姫はそんなことには構わずずっと捲くし立てていた。

「本当に困ったパートナー！」

いつまでも怒っている紅姫に嫌な顔もせずに笑って受け流していると決まって彼女は頬を膨らませて「もう、仕方ないわね」と言う。

「初めての外での任務なんだから、ちゃんと下準備しないと危険なんだから」

「そうだよね、反省しています」

軽々しい言葉に一睨みして、なおも続けた。

「もう、下調べはしておいてあげたから、これちゃんと読むのよ」

そう言って取り出された紙は人間が読むには少し、というかだい

ぶ小さすぎる。これには苦笑を漏らすほかにない。

「もう本当に仕方がないんだから！」

怒りながらもどこか嬉しげである。

紅姫は劉峰の肩に座りながらそれを読み上げた。

「噂、その一、川岸の町で魔物が出た。

噂、その二、子供が魔物にさらわれ町が襲撃を受けた。

噂、その三、二人の子供と保護者が魔物を退治した。

そして噂、その四、彼らはＯ－パーツを持っていた。どれも憶測の域は出ていないけれど噂になると言うことは何かあったと考えることが正しいわよね。それに共通点として、魔物が上げられるからちゃんと用意はしておいたほうがいいわ」

自信満々に答える紅姫の言葉に、劉峰は不謹慎ながら「それって噂というより過程に近いのではないか？」と考えていた。

そしてＯ－パーツの存在を自分の目で見ることができるかもしれないという事実に少なからず心が躍る。

神輝の学院の奥に保管されているＯ－パーツも見たことがなかったので他の武器がどんな形をしているかなど、劉峰には皆目見当もつかないが、それでもインフィニティ・モンスターを倒すことができるのだから神々しいに決まっていると思っていた。そしてその武器を持っているものが子供かもしれないという言葉に心中、穏やかでいられるはずがない。

「選ばれるってどんな気持ちなのかな」

呟くと、紅姫はゆっくりと彼のほうを向いた。

「選ばれたかった、の？」

恐々と尋ねると、劉峰は笑顔でうなずく。

「もちろん。でもそれと同じ位、選ばれなくて良かったとも思っている」

劉峰の目は紅姫を見てはおらず、真っ直ぐと前を向いていた。緊張した空気でも、砕けすぎた場でもなく、穏やかな気持ちがそこには流れている。しかし納得しているのは彼一人である。パートナーはわけがわからないと言った面持ちで尋ねる。

「どうして？」

長く生きていれば人間の思考など大よそ見当がつくようになる。人は強いものに憧れ、それを手に入れようとする生き物ではないのだろうか。紅姫の問いがそのまま質問となって返ってきた。

「紅姫の目から見て、僕って英雄に見える？」

きょとん、とした瞳はすぐに笑顔に変わった。

「見えない」

当然と予想通りの答えに嫌な顔もせず、静かにうなずいた。

「僕もそう思う、だから選ばれなくて良かったって思ってる」

「う～ん、わからないよ」

困った顔して首をかしげている姿は本当に可愛らしい。劉峰は苦

笑しながら、その理由を教えてくれた。

「僕にとって、勝手かもしれないけれど、英雄の理想像はキサナ様なんだ」

それは神輝にいるものだったら誰でも一度は思うことだろう。

紅姫は、ふむふむ、とうなずく。

「そしてO－パーツに選ばれるってことはそのキサナ様と同じ場所に立つってことだと思ってる。僕には……そんな重圧、耐えられないよ」

そう言って笑う姿に偽りはなく、本当の感情なのだろう。

人は何とも不思議な生き物である、紅姫は劉峰を見ながらそう思っていた。その言葉も、その笑顔も嘘ではないのに、瞳だけがもっと高みに上りたいと訴えているようであった。

「人間って変わってる」

思ったことを口にしていることなど思いもよらず、今度は彼が意味をわからずにきょとんとしていたが、その答えは返ってくることはなかった。

比較的ゆっくりと歩いている劉峰であるが、川岸の町ならばそれほど時間はかからない。急げば半日でつくほどの距離であるため、彼も急いではいないのだ。

紅姫と違い、外に出ること自体初めてである彼は見るもの全てが新しく、興味深いものであった。また紅姫も外に出るのは一五年ぶりなので、久々の外を満喫しているようである。

「劉峰、劉峰」

小さい手で彼の頬を叩きながら左手で指差す。

「あれが藍柑の木だよ、春になると白い花が咲いて、夏に青い実をつけるんだけど、秋にはその実が真っ黒になるんだよ。もぎたての黒い実は本当に美味しいんだよ、劉峰は食べたことある？」

考えるに、市場で売っているものがもぎたてであるはずがない。無論、食堂で出てくるものも違う。

「もぎたては、ないな」

優しく言うと彼女も、うんうん、とうなずく。

「そうだよね。あっ、あっちに生えてるのは蜜花の木だ。春に桃色の実がなるんだよ、夏までその実を放っておくと人間くらいのサイズになるんだけど、その大きい実はすごく不味いの。魔物さえ食べないくらいに」

小さな両腕を大きく広げて喋るそのさまは、まるで人間の子供のようであった。微笑ましい、そんな言葉がぴったりである。

「そうなんだ」

キラキラと輝く瞳が劉峰を見ることはなく、さらにその先にある新たな木を見つめている。

「あっ、あれはね、茶味の実が生る木だよ。実の中の汁がすごく甘くて、ほろ苦くて美味しいの。一年中生ってるんだ、飲んでみる？」

「いや、今はいい」

「そう。あとね、あそこのはね」

指差す先よりも興奮気味の妖精の方が気になるのは言うまでもない。少し、尋常ではない様子から嬉しがっていることを悟った。

「紅姫」

一度目の声は丁寧に。

「成長するまでにすごく時間がかかるんだよ」

「紅姫」

二度目は少しだけ強めに。

「それからね」

「紅姫！」

そして三度目はいつまで経っても話を止めようとしない紅姫を怒鳴るように大きな声で。そこでようやく妖精のマシンガントークも一度、終わりをみせた。

「何？」

言うに事欠いて、何、とは言葉もない。

劉峰は盛大にため息を漏らして、それから今まで紅姫が言っていた木々を順番に眺めてみる。あいにく今の時期に実が生っているのは茶味だけであった。

「食べてきても、いいよ」

茶味の実を指差して言うと、紅姫はとても嬉しそうに笑い、一つうなずいてから彼の肩を飛び立った。
紅姫の考えを察するのはとても簡単である。彼女たちはほとんど自分の欲求に正直であり、この心優しい妖精に至っては中々言い出せないときはそれに関連していることを勢いよく喋りだすのであった。
遠目から見ると紅姫の羽の輝きしか目に入ってこない、実の近くで何か小さなものが光っているようにしか見えないのだ。あれがインフィニティ・モンスターとはとても思えない。
そもそも劉峰が紅姫をパートナーとして連れ添い始めたのは一五年も前の出来事がきっかけであった。彼女は女性だからという理由で自分の年齢を話さないが、おそらく百は超えていると、彼は考えている。その紅姫が一五年前、羽に傷を負って、黒い魔物に追い回されていたのだ。当時三歳だった劉峰が助けられるはずもなく、魔物を退治したのは彼の父親であった。
黒い魔物を倒した後、父は小さい身体を震わせて恐怖に満ちた瞳をした妖精を上には内緒で息子に与えたのだ。自分の息子の意思と、彼女の運命に任せることにしたのだ。そしてその結果、劉峰は紅姫を助け、彼女は彼に付きまとうようになった。
今は魔物から妖精を助けた父も亡くなって、いない。しかし劉峰は父親が亡くなったとき、さほど悲しくはなかった。それはきっとあそこで輝いている妖精のお蔭だということを、わかっている。
劉峰は雄大な景色を望みながら、自分は人として何かおかしいのかもしれないと感じていた。本来、インフィニティ・モンスターと人間は相反する生き物でなければいけない。神輝でもそう教わってきたのだ。それなのに、彼には紅姫と自分が仲良くなってはいけないとは思えなかったのだ。むしろ、仲良くして何が悪いのかと思うほどであった。
「僕、人間として、欠陥品なのかな」

頭を掻きながらそれでも紅姫がいるのなら、それも良いと思っていた。

「劉峰、劉峰」

紅姫は小さい身体で、それなりに大きい茶味の実をよろよろと持ちながら、戻ってきた。

「どうした？」

「これあげる」

彼女から実を受け取ると、疲れたのか定位置に座り劉峰の首に寄りかかる。

「飲んで、美味しいから」

目を閉じて、そう言うと、彼が優しい声で礼を言った。

「ありがとう」

紅姫は劉峰の優しい声が好きなのだ。
紅姫は劉峰の優しい瞳が好きなのだ。
紅姫は劉峰の優しい香りが好きなのだ。
だから側にいたい、例えそれがインフィニティ・モンスターと人間の不確かな関係であったとしても、よかった。彼さえいれば、何もいらないと思えるから。
寄りかかり、丁寧な揺れが彼女を眠りに誘う。

「劉峰、お休み」

小さく呟き、紅姫はそのまま眠りについた。
肩という不安定な位置でよく眠りにつけるものだと感心しながら、劉峰はゆっくりと川岸の町を目指した。
そして目が覚めたとき、大切な人が側にいなかったので紅姫は驚いた。見たこともない部屋に自分が寝ていたことさえ気がつかないほどに。
きょろきょろと辺りを見回し、窓に近寄る。眼下に広がる景色から推測するに、ここが川岸の町なのだろう。本当に魔物が出たのか疑わしいほどに賑やかな夕刻の風景にたった一人、取り残されているようであった。

「劉峰、どこに行っちゃったんだろう」

ひとり言を呟き、窓に映った自分の姿を見つめていた。

「あっ、町だから、このかっこうはマズイか」

目を閉じて、なりたい姿を思い浮かべると見る見るうちに愛らしい小鳥に変わっていく。綺麗に変化し終えて、目を開けると窓には赤い羽が映っている。
改めて鳥の姿を見るとかわっているような気がした。赤い鳥などあまり見かけない、一緒にいる劉峰は気味悪がらないが、これほど赤い羽をした鳥など見たことのない大抵の人間は薄気味悪いと言っていた、まるで血が染み付いているようで。そう言われれば、そんな気もしないでもない。しかしこの赤は血の色ではなく、紅姫の名と、大好きな花からイメージしたものなのだ。血と言われるたびに心外だった。
やっぱり人間には青い鳥のほうが馴染みあるのだろうか？
もう一度目を閉じ、今度は色だけを想像した。

赤い羽がどんどん紫に変色し、そこから必要な色だけが際立っていく。
再び目を開けて映し出された姿を見ると、確かに幸せを運んできてくれそうな鳥である。今は見えない、空と同じ、美しい澄んだ青。しかし別に幸せを運ぶ鳥になりたいわけではないので、これは却下である。
もっと目立たない、風景に溶け込む色。
彼女はどんなに人間界に馴染んでいてもインフィニティ・モンスターである。目立たなく、風景に溶け込む色を想像するに、それは彼女の本質から一色しか思い当たらない。
闇に溶け込む黒。黒い鳥は不吉を呼ぶと言われている昨今、さすがにこれでは飛び回れない。紅姫自体はさして気にならないが、おそらく一緒にいる劉峰が陰口をたたかれるに決まっている。それは許せないので、もっと違うものにしなくては。
次は今の空色、灰色の鳥である。これならば、とも思ったが、美しいものが大好きな妖精にとってこれはあまりにも地味過ぎる。
それならば、白はどうだろう。
決してその手が汚れていないことはなく、彼女も今でこそ人は殺していないが、昔はその手で何人も殺めているのだ。白い存在でないのだから、その色はとても気が引ける。
結局、気味悪がられても、赤が一番ということで落ち着いた。
一人色変えショーが終わったところで、紅姫の探していた人物が部屋に戻ってきた。
こん、こん、と二回ノックの音がしたあとにトレーにたくさんの食事をのせて劉峰が帰ってきたのだ。

「あっ、起きた？」

よく目立つ赤い姿を目に映し、尋ねると、鳥はものすごい勢いで彼に飛びついてきた。おそらく抱きつきたかったのだろうが、嘴が

ある状態で突進してきたら、こちらが怪我をする。咄嗟に避けると紅姫はそのまま閉められた扉に、ゴン、という音をたててぶつかっていた。

「……えっと……大丈夫か？」

驚いて、戸惑っていると彼女はふらふらしながら部屋に備え付けられているテーブルの上に舞い降りた。

相当痛かったに違いない。目がぐるぐるしている。

「平気か？」

テーブルの上に食事を置き、彼女の目線まで身体を屈ませる。妖精の姿のときは綺麗で、鳥になると可愛らしいが、こんなドジな様子を見てしまうと笑わずにはいられない。

必死に笑いを堪えて、もう一度大丈夫かどうか聞くと、紅姫も頭を縦に振った。

「よかった」

ホッとして、劉峰はイスに座った。

「おなか、すいているだろう。食事もらってきたから食べるといい」

目の前のトレーにはたくさんの料理が並べられていた。

野菜や肉の他にも焼き魚まである。普通に考えれば小鳥にこれだけの量は多すぎるのだが、彼女にはとても少量に見えていた。

「足りなかったら今度は一緒に下に行こう」

紅姫がたくさん食べることを知っている劉峰は彼女の心情をくみ取って言ったのだ。もちろん、鳥に否定の気持ちはなく、思いっきりうなずいていている。

この妖精、小さい身体の割には異様によく食べるのである。食べた分どこに吸収されているのか、はたまた胃がブラックホール並みだとか、そんなこと劉峰でさえ思っていることである。それでも彼女はたくさんの食事をしなければならない。そうしなければ人の生気を食べないと正気を保てなくなるので仕方がない。

インフィニティ・モンスターが人の世界で生きるには何と不便なことなのだろうか。それでも自分と共にいてくれることを感謝する。

優しい眼差しを向けながら、彼は下で聞いてきた話を口にした。

「噂のこと聞いてみたけど、誰も何も知らないって言われたよ」

食べたものを口に含んだまま、もごもごと何かを話している。

「ピィ、ピピィ？」

「いや、食べ物がなくても小鳥語はわからないから」

苦笑いに、紅姫もうなずいた。

小鳥は首を激しく振る。別段、何かが変わったようには見えなかったが大きな違いはすぐにわかった。

「えっと、これでいいかな？」

いつも通りの声に思わず感嘆のため息がもれる。

妖精とは実に便利なものである。赤い鳥から青い鳥に、青い鳥から黒い鳥に、心で念じればいくらでも色を変えることも形さえ変えることもできる。だから言葉を話すという条件付きの変化など簡単なことなのだ。

あらかたの食事を食べつくし、デザートをつっつきながら紅姫は先ほどの考えを述べた。

「きっと警戒しているのよ、誰だって初めて見た人間を相手にしたら用心するものでしょ」

とても当たり前の発言に劉峰は首を傾げる。

「そうかな、そんな感じじゃなかったけどな」

「そうなの？」

「うん、どちらかというと」

そこで言葉を区切り、劉峰は先ほどの店内での会話を思い出していた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3890y/

零のパーツ

2011年11月10日01時13分発行